

年間第二十一主日

2012.8.26

(ヨハネ 6・60-69)

五つのパンと二匹の魚をもって、五千人を超える人々の空腹を満たす奇跡の物語から始まったヨハネ福音書6章のイエスのみことばを、八月の主日のミサの度ごとに連続して聴いてまいりました。あらためて聖書を開いて、ヨハネ福音書の6章を読み返してみると、日曜日の朗読では省かれていた部分があることに気づきます。それと同時に、一連のイエスのみことばを聴いている人々、つまり、イエスが語りかけている相手を指すことばが、節を追うごとに変わってきていることにも気づきます。最初のうち、イエスはパンの奇跡の後ご自分の居場所を探し当てて集ってきた大勢の人々、群集と表記された人々に語り始めます。「あなた方がわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからである。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。」とイエスは語りかけ、これこそ人の子、つまり、イエスご自身が与える食べ物であると言っておられます。このイエスのことばによって、ヨハネ6章の大部分を占める、永遠のいのちに至る食べ物をめぐってのイエスと人々との対話が始まります。

「永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。」というイエスのことばを聞いた人々は正確にその意味を捉え、「そのような神のわざを行うためには何をしたらよいのでしょうか」とイエスに尋ねます。それに対して、イエスは「神がお遣わしになった者を信じること、それが神のわざである」とご自分への信仰を求められます。そこで人々は「それでは、わたしたちが見てあなたを信じる事が出来るように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。」と尋ねます。イエスが行われた奇跡によって空腹を満たされた人々は、その感激の余韻の中で、旧約のマンナのことを思い出し、イエスに更なる天からの奇跡を期待します。旧約のマンナの話を持ち出して新たな天からのしるしを求める人々に対して、イエスは「わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て世にいのちを与えるものである。」と現在のこととして、新たな天からのパンについて語られ、さらに、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください。」という人々の願いに答えて、「わたしがいのちのパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」と宣言されます。

しかし、人々はイエスが語られることを理解することが出来ません。彼らの心はこの世の生活から離れることがないからです。彼らが期待していることはイエスが行ってくださる新たな奇跡だけだからです。

ここで、それまで群集とか人々と言われていたイエスの対話の相手がユダヤ人と特定されることになります。「わたしは天から降って来たパンである。」とイエスが言われるのを聞いたユダヤ人たちは「これはヨセフの息子のイエスではないか。われわれはその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのかとつぶやき始めます。しかし、イエスはそれを無視するかのようになり、「わたしは天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生きるためのわたしの肉のことである。」と更に彼らを困惑させることは言われます。ここに至って、ユダヤ人たちは互いに議論しあうだけで、イエスとの対話に応じようとはしなくなり、イエスのことばだけが響きます。「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内にいのちはない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲みものだからである。」更にことばを続けて、こうも言われます。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。」

これらのことばをユダヤ人たちが受けつけられないのは、彼らが忌み嫌った、「血を飲む」というような表現が使われているからだけではありません。イエスのこれらのことばが暗示している、イエスの十字架の死によってもたらされる神の救いと新たないのちを、ユダヤ人たちは結局信じる事が出来ないからです。しかし、注意深くイエスのこれらのみ言葉に耳を傾けるなら、ここで語られていることは、わたしたちのキリスト教の信仰の核心部分、キリスト教の中心的な信仰の神秘を言い表していることが分かるはずで

今日朗読された福音の直前の 59 節は、省略されていますが、そこでは「これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。」と述べられており、これまでのことが一区切りされています。今日の福音では、後日譚のような形で、これまでイエスが語ってこられたことに対する弟子たちの反応が取り上げられています。「実のひどい話だ。誰がこんな話を聞いていられようか。」そう言い捨てて、弟子たちの多くの者たちがイエスに背を向けて去って行きます。彼らは最も肝心なところで、イエスのことばにつまずき、それを受け入れることが出来なかったのです。そればかりではなく、イエスの弟子として、このような信仰を人々に宣べ伝えて行く自信がもてなかったのです。そのような弟子たちに対してイエスは、「いのちを与えるのは霊である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなた方に話したことば霊でありいのちである。」と言われ、「こういうわけで、わたしはあなた方に『父からお許しがなけ

れば、誰もわたしのもとに来ることは出来ない』と言ったのだ。」と言われていきます。これらのイエスのおことばをどのように理解したらよいのでしょうか。

教会に行ったことも、ミサに出たこともない人が、たまたま聖書を手にとってヨハネ福音書を読んだとしたら、おそらくその人はこれまでイエスが言ってこられたことを全く理解出来ないに違いありません。わたしたちが、曲がりなりにもヨハネ6章でイエスが言われていることの意味を理解することが出来るとしたら、それは教会と出会って、洗礼の恵みを受け、ごミサにあずかってご聖体をいただいているからです。これらはみな、神が私たちを引き寄せてくださった結果であり、聖霊がわたしたちを導いてくださっているおかげです。

今日も私たちはこうしてミサに集うことが出来、このミサの中で、ペトロをはじめとするイエスのもとに留まった弟子たちと同じ信仰を告白して、イエスご自身であるいのちのパンをいただきます。イエスのおことばによれば、これこそが私たちがなすべき神のわざなのです。今日もまだまだ続く猛暑の中こうしてミサに集った私たちは、イエスが求めておられる神のわざを行い、その私たちの努力応えて、イエスは私たちをその永遠のいのちで満たしてくださるのです。洗礼の恵みによって与えられたこの信仰の中に踏みとどまることが出来るよう、今日もイエスのもとにとどまる決意を新たにして、このミサをともにおささげしたいと思います。暑く、厳しい日々の中で私たちがこのミサのためにささげる犠牲は、私たちのために十字架の犠牲を全うされたイエスの愛に応える、私たちの愛の行為なのです。この愛によって、私たちはイエスと一つに結ばれてそのいのちに養われるものとなることが出来るのです。そのようなイエスの愛に応える私たちの愛のしるしとして、ともにこのミサをささげたいしましょう。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高